

☆☆情コミプリント (前期) ☆☆

📖ドイツ語B I (飯森 先生)📖

Lektion 1: Da unten, das ist Deutschland

-- 下はドイツ --

エリコ：下のほう——それはもうドイツなのかしら？

私：うん、私はそう信じるよ（思うよ）。

もうすぐ私達はフランクフルト。

エリコ：私は少し落ち着かないわ。

私：落ち着かない？ 本当に？ 一体、なぜ？

エリコ：私はここではよそ者（私はこのことをよく知らない）。

それに、私はほとんどドイツ語が分からないわ。

私：君はすぐにドイツ語が分かるよ（覚えるよ）。

それに君は長く fremd じゃないよ（すぐに慣れます）。

なにしろフライブルクは好感が持てる（気持ちのいい所だ）し、君もとても好感が持てるじゃん。

エリコ：君はそう考える？ 私が？ 私が…？ ありがとう。

Lektion 2: Die Bahnfahrt nach Freiburg

-- フライブルクへの列車の旅 --

マインツ - マンハイム - カールスルーエ - パーデン・パーデン - フライブルク - パーゼル

これがそれだわ。これがフライブルク行きの列車だわ。14 時出発、16 時到着。今は 1 時か。まだ 1 時間ある。

エリコは待ちます、座って考えます。フライブルクはどんな街でしょう。大学、そして何もかもどんなところでしょう。

列車が来ます。

村また村。野原また野原。森また森。街はいったいどこでしょう。ドイツは工業国じゃないの、違いますか？

お金はあるかしら？ はい、そこにあります。そして、パスポートはどこですか。そこにあります。しかしキップはどこだろう。これ（お金とパスポート）しかない。おお、それはここにあった。私は本当に落ち着かないわ。

Lektion 3: Eriko nimmt ein Taxi

-- エリコはタクシーを使う --

エリコはトランクとバッグを持っている。両方とも重い。そのとき突然、誰かが彼女に尋ねます。“アキコ！！君！？こんなところで君と会うなんて！？私をまだ覚えていますか？”

エリコは一人の男を見ます。しかし、彼女は彼を知りません。もちろん、知りません、というのは、彼女はアキコではないからです。

“私はアキコではありません、私はあなたを知りません”と彼女は言う。

“人違いでした、ごめんなさい”と彼は言う。

彼は戸惑っています。

エリコは微笑みます。

“すいません、私はお願いがあります：ここにホテルの予約があります：ローランベールンというホテルです。ひょっとして、このホテルを知っていますか？”

“はい、もちろん。ここから遠くありません、しかし、あなたは荷物を持っている。タクシーにお乗りなさい（乗ったらいいですよ）。”

そこで彼はトランクとバッグを受け取ります：

“来てください！！あなたを手伝いましょう、あの前にタクシーがあります。”

Lektion 4: Eriko gefällt Freiburg

-- エリコはフライブルクを気に入る --

タクシー運転手：ホテルに着きました（ここがホテルです）。

5 マルク 30 ペニヒ、お願いします。

エリコは 6 マルク 50 ペニヒを渡します。

エリコ：ありがとう。これでいいですね。

タクシー運転手：ありがとう。ちょっと待ってください。

私がああなたをお手伝いしましょう。

彼は彼女のトランクを運びます。彼は彼女に、“フライブルクでの滞在が素晴らしいものになりますように（フライブルクでの素晴らしい滞在を望みます）、さようなら。”

私の名前はサカモトです。

彼女はフロントの男の人に予約を見せます。

はい、サカモトさんですね。ちょっとお待ちください。

ドイツ語B I (飯森 先生)

それから彼は部屋の鍵を渡します。

その時計はカチカチ音を立てています（鳴っています）。 朝の3時です。

しかし、エリコは全く目が覚めています。

東京では、今もう午前10時です。

彼女はのどが渇いています。 そこに冷蔵庫があります。

中には何があるのでしょうか。 ビール、ワイン、ジュース、ミネラルウォーター。

そこに本があります：『フライブルクを旅して（フライブルクの観光客として）』。

彼女はページをめくってその本を読みます。

私たちと同じように、フライブルクがあなたを気に入りますように。

そこでエリコは考えます。

今、私はフライブルクがすっかり気に入りました（フライブルクは私に気に入ります）。

Lektion 6: Eriko trägt ihr Gepäck ins Dachgeschouß

-- エリコは荷物を最上階に持っていく --

寮母さん： あなたの部屋は最上階にあります。 この階段を上ってください。 それから左に曲がってください、通路のつきあたりです。

まだ2つ階段があるわ！ 荷物が鉛のように重く感じられます（荷物が鉛のように彼女の腕にかかります）。 418号室。 ようやく私の部屋です。

突然、誰かが彼女の後ろに立ちます： ああ、私のお隣さんですね、そうでしょ？ 日本からでしょ。 もう知っています。 私はターニャ。 あなたの名前は？

私はエリコといいます。 こんにちは。

あなたの荷物を、まず、あなたの部屋に置きましょう。 この角はどうかしら。 部屋は気に入りましたか？

はい、とても。 見晴らしはとてもよいです。

私の所へ来ませんか？ お茶を出すわよ。

ターニャは21歳で医学生です。 彼女は現在、試験の勉強をしています。 それで、彼女は今もここにいます。 そうでないときは（そうでなければ）、彼女は休暇はいつも田舎の両親のところに帰省します。 あるいは友達と車でドイツが外国を旅行（ドライブ）します、スイス、フランス、等々。 今年は、だから出かけません。 彼女は夜遅くまで勉強します。 しかし、その間も彼女は友人や知人とおしゃべりするのが好きです。